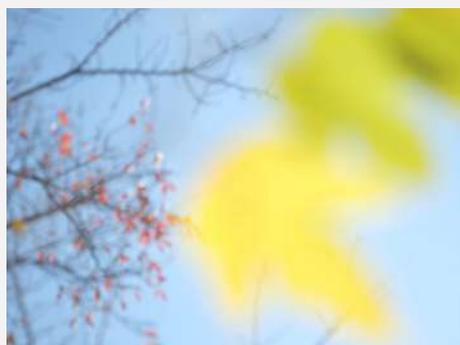


公園は、より良い社会のための練習場



はじめに:公園から社会をつくること、そして、そのための本づくり	4
1. 公園に、行ってみませんか?	6
栗山公園では例えば、インクルーシブ遊具ができました	9
三楽公園では例えば、土と遊べる菜園ができました	10
梶野公園では例えば、子どもたちの遊びを応援してくれる方々との連携が進みました	10
2. 顔の見える公園を目指して	12
日比谷アメニス:毎日、市内の公園を巡っています	13
こがねい子ども遊パーク:いっしょに遊ぼう	14
さわらび学童保育所:三楽公園の隣でスペースを開放しています	15
梶野公園サポーター会議・花ボラの会:遊具は無いけど、花も、憩いもあります	16
小金井市立小金井第四小学校:出張授業で学んでいます	17
三楽会:根付いて広がる、愉快的気分	18
社会医学技術学院:地域とともにある理学療法や作業療法を	19
出茶屋:梶野公園の木漏れ日の下、珈琲を飲みます	20
インクルーシブ遊具:作り手と使い手の関係性を育みたい	21
3. 公園は、なにもしないでも居られる場所です	25
4. 公園に、参加してみませんか?	27
栗山公園では例えば、「ピクニックから始めるビオトープづくり」が進められています	28
三楽公園では例えば、「土と遊ぶことができる畑づくり」が進められています	29
梶野公園では例えば、「美味しい日陰づくり」が進められています	30
5. 公園は、より良い社会のための練習場	31
公園を社会のための練習場としてとらえること	32
play here が考える「練習」	33
公園でイベントをしたくなったら!?	35
6. 知ってもらいたい、「障害の社会モデル」という考え方	38
おわりに:終わらせないための工夫をすることが、まちづくり	41
まだ始まってないし、成功したとも言えない	42
託された人が困らないようにしておく	43
絡み合った複雑な問題に対しては、こちらも絡み合っただ対応したい	45
人間同士であることの回復	46
顔が見えるということ	47
「持ち寄って成り立たせる」ことの練習	49
位置づけという仕組み化	49
挨拶という他者との架け橋	50
礼がないと始まらない	50
心の内面を問わないものとしての仕組み	51
ハードとともに、コミュニケーションを整える必要	52
歴史の延長線上にある希望	53
管理ではなくマネジメント	54
活動そのものがアーカイブ活動	55



はじめに：公園から社会をつくること、そして、そのための本づくり

これは、小金井みんなの公園プロジェクト「play here」のコンセプトブックです。

公園を、障害のあるなしにも関わらず誰もが自由に遊べる場所にもっとしていききたい。ここで遊ぼう。誰もがその思いを実現できる街にしていききたい。じゃあ、どうすればよいのか？その模索のプロセスを追ったドキュメントでもあった一冊目のインタビュー集に続く、二冊目のものになります（両方とも、テキストデータを公式サイトで公開しています）。

なぜ、公園のプロジェクトで立て続けに本をつくるのか？

さまざまな考えや背景を持つ方々の声が集まっているという意味では、本も公園も社会もどこか似ている。だからか、本づくりというものは、どこか、公園や社会づくりと似てくる。つまり、より良い本づくりは、より良い公園や社会を生むはず。なんて理屈っぽいことも考えながら、同時に、実際に公園の遊び場の環境整備が一旦の完了に向かう2025年度末に出来上がるこの本を、そのタイミングに合わせて、実際的な公園の利用や活用に向けた具体的な情報を含むものにしたいと考えました。

なぜなら、公園に行きづらさを感じてきた方々に、気持ちや足を公園に向けてもらいたいからです。

だれでもトイレは？そこに、ベッドは？そのベッドの大きさは？白い目で見られない？ずっと謝らないといけない？公園の駐車場に停められる？車椅子は通れる？子どもが道路に飛び出ていかないようになってる？医療的ケアをするスペースはある？といった、公園を利用するにあたって気をつけなければならないこと（気をつけなければならないことの多さを認識するところから、このプロジェクトは始めています）。

ピクニックしてもよい？イベントをしてもよい？公園のビオトープづくりや菜園づくりに参加するには？といった、公園を活用するにあたって知っておいて頂きたいこと（公園は、ちょっとした挑戦をしたり、やってみたかったことを実現する場でもあります）。

公園を、障害のあるなしにも関わらず誰もが自由に遊べる場所にもっとしていききたい。この本も同じようなこととして、障害のあるなしにも関わらず、「みんな」に読んでもらいたいものとして制作しています。のではありませんが、少しでもこれらの気がかりに応える本でもありたい。公園に行きづらさを感じてきた方々が少しでも希望を感じるものでありたい。そう考えています。そして、その希望とは「別のあり方だとしても、みんな同じように生きている」ということから始まる、ごく当たり前の話であるようにも思います。

遊具やトイレなどの環境整備の完了はプロジェクトの終了を意味しませんし、そもそも終わりにしてはいけません。公園を「みんなで」望むものにしていくための活動が欠かせません。公園は、より良い社会のための練習場。そう思います。どのような練習が成されているのか？成されるべきか？それをみんな考えて実践していけたら最高です。

熊井晃史（小金井みんなの公園プロジェクト「play here」ディレクター）



1. 公園に、行ってみませんか？

「公園に行ってみませんか？」という誘い文句を気軽に口にする気分になりません。なぜなら、「公園に我が子を連れて行くと、周りから白い目で見られて耐えられない」「子どもが動き回るし、移動が大変で、そもそも連れて行けない」「遊具の順番待ちなどが苦手で、いつも謝ってばかりでしんどい」という声を多くお聞きしてきたからです。それでもなお、子どもと公園で遊ぶために「人が居ない早朝の時間帯に公園に行っている」というエピソードも繰り返し耳にしてきました。公園に気軽に行けていた側からすると、これらのお話は大きな衝撃であり、それらをしっかりと受け止めることができているかどうかについては、いまだ自問自答が続いています。とはいえ、少しでも地域社会を前進させたい。そのような想いで、多くの方々のお力により **play here** では様々な環境整備等を推進してきました。そうして、やっと「公園に行ってみませんか？」という誘い文句を口にする気持ちになれた気がします。

公園に行きづらさを感じてきた方々に、気持ちや足を公園に向けてもらいたい。この章では、小金井市において環境整備等を行った3つの公園を、「あ、これなら行けるかも」「あ、これなら安心かも」と思っていたくための紹介をしていきます。

急いで付け加えます。これらは、決して障害のある人への「思いやり」や「助けてあげること」ではありません。障害のあるなしに関わらず、等しく公平に地域社会で暮らしていくために、「みんなで」より良い社会をつくっていく。工夫をしていく。これらは、そのためのごく当然の営みや仕組みの一環であり、そのためのプロセスです。

ですので、「公園に行ってみませんか？」という誘い文句は、障害のあるなしに関わらず「みんなで」、こういう工夫を社会に広げていきませんか？というお誘いでもあります。





公園を、隣りのあるなしに関わらず
誰もが自由に遊べる場所に
もっていききたい。

play here

小金井みんなの公園プロジェクト

ここで遊ぼう。
なにげないけど大切な体験を重ねる。
あよっとした気附らしや息抜きをする。
約束なしに集うことができる。想いも寄らない出会いがある。
身近な公園は、本来その舞台です。

ここで遊ぼう。
それを願えど叫べない子どもたちがいます。
人と関わるのが苦手。からだが思うように動かない。
だから、公園に行けない。行かない。
遊びたい気持ちをくじかれてる子どもたちがいます。
でも、身近な公園は本来、誰にでもひらかれている場所です。

ここで遊ぼう。
人と関わるのが苦手。
でも、動物や昆虫や植物と関わるのが好き。
からだか思うように動かない。でも、ここは探動している。
遊びは、ものごとの多面的な捉え方をもたらしてくれます。

ここで遊ぼう。
これは、小金井を、誰もがその想いを実現できるまちに
していくためのプロジェクトです。

栗山公園では例えば、インクルーシブ遊具ができました

●インクルーシブ遊具を設置しました。

→車椅子のまま乗ることができる回転遊具や身体を支えることが難しい子どもでも遊べる球体型のブランコなどがあります。

●道路への飛び出し防止のためのフェンスがインクルーシブ遊具の周辺に設置しています。

●遊具の待ち列への並びやすさなどにも配慮した環境デザインを行いました。

●既存の池をビオトープ化し、水辺の動植物を誰もが親しめる環境を整備していきます。

→それらの活動を障害のあるなしに関わらずみんなで協力しながら行うワークショップ型で進めていきます（play hereの公式Instagramや市報にてお知らせしていきます）。

●栗山公園にはBBQ広場があります。

→小金井市の「公共施設予約システム」で予約ができます。

●障害がある方の利用がしやすい駐車場を整備しました。

→台数に限りはありますが、ぜひご利用ください。

●健康運動センターにも、障害がある方が利用しやすい駐車場があります。

→健康運動センターの受付にて「利用登録」をしていただくと、スムーズにご利用いただけます。

●2026年度には、既存のトイレの改修をします。

●車椅子利用の方の動線を確保しました。例えば、ビオトープへのスロープを整備しました。

●園内の健康運動センター内の医務室を障害がある方が多目的に利用できるようになりました。

→カームダウン、医療的ケア、おむつ替えといった多目的に使えます。利用される場合は、健康運動センターの受付にお申し出ください。

●近隣の教育施設等と連携し、教育機会や地域の居場所を創出します。



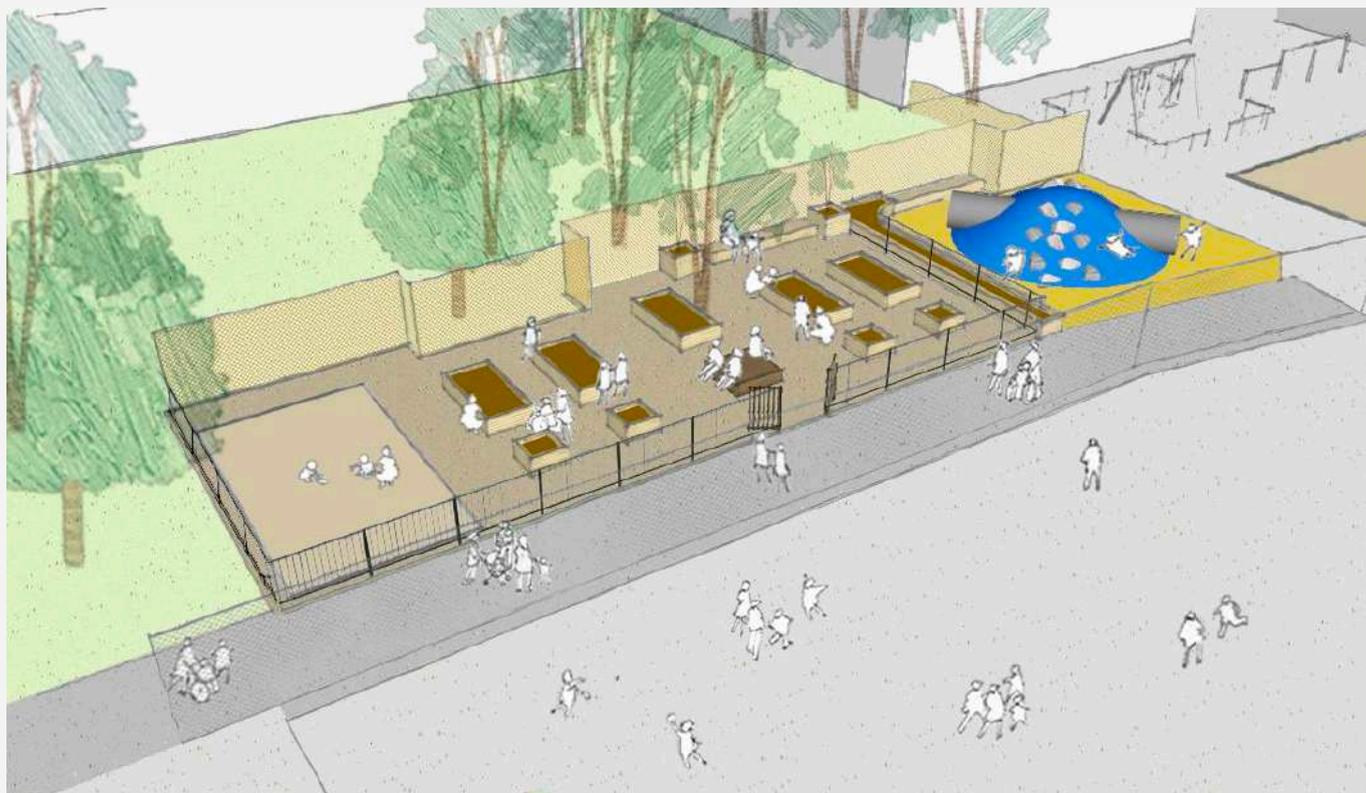
令和6年度整備計画より抜粋（一部変更あり）

三楽公園では例えば、土と遊べる菜園ができました

- 球技利用といった動的な利用と、それ以外の利用が共存できるようにします。
- 車椅子利用の方の動線を確保しました。
- だれでもトイレを整備しました。
- 木陰などで休める場所を整備します。
- 気軽に土や植物に触れることができる環境を整備します。

→インクルーシブな菜園づくりをワークショップ型で進めていきます（play hereの公式Instagramや市報にてお知らせしていきます）。

- 道路への飛び出し防止のためのフェンスを公園全体に設置しました。
- 近隣の教育施設等と連携し、教育機会や地域の居場所を創出します。



令和6年度整備計画より抜粋（一部変更あり）

梶野公園では例えば、子どもたちの遊びを応援してくれる方々との連携が進みました

- 「遊具がないことの豊かさ」を大切に、公園に関わっている方々との連携を深めることで更なるインクルーシブな状況を創出します。

→例えば、NPO法人こがねい子ども遊パークが、梶野公園でも定期的に「冒険遊び場事業（プレーパーク）」を進めています。

- 道路への飛び出し防止のためのフェンスが公園全体に設置されています。
- 駐輪場に公園利用者以外の自転車が留め置かれる問題を解決し、車椅子利用の方の動線の確保に努めています。
- 障害がある方の利用がしやすい駐車場を1台追加整備しました。
- 既存のだれでもトイレに介助用ベッドを整備しました。
- 果樹の木陰や座れる場所を兼ねた菜園を整備しました。

→インクルーシブな菜園づくりをワークショップ型で進めていきます（play hereの公式Instagramや市報にてお知らせしていきます）。



令和6年度整備計画より抜粋（一部変更あり）

2. 顔の見える公園を目指して

多くの方々のお力添えを頂くことで手応えを感じることができている一方で、「だれでもトイレ」や障害のあるなしに関わらず遊ぶことができる「インクルーシブ遊具」等の整備をしたとしても、障害があるとされている子どもたちを持つ保護者の方々の心理的な不安や懸念を満足に取り去ることに難しさを感じている次第です。なぜなら、「誰かに迷惑をかけてしまうのではないか」「子どもが奇異に映ってしまうのではないか」といった心配から、公園（そして地域）に出るためにそれなりの勇気を要するという声が変わらず多くあるのが事実だからです。

とはいえ、であるからこそ、「ふとした挨拶や声かけをされるだけで、勇気を出して公園に行って良かったと思うことができる」という声も多く寄せられ、そこに可能性や地域の力を感じている次第です。

そんな良い兆しを膨らませたい。この章では、「顔の見える公園を目指して」と題して、公園にまつわる方々をご紹介します。今、スーパーでは「顔の見える野菜」が並ぶことが当たり前になりました。顔の見える状態が安心感を生むからであるように思います。公園も同じように、顔が見えてくることで生まれる安心や安全があるように思います。

ご紹介にあたっては、**play here**の趣旨等をご説明させて頂いたり、逆に、公園を担ってくださっている方々のお話を伺ったりと、学び合いの時間を過ごさせて頂きました。人に、公園に、歴史あり。**play here**は、それらの歴史の延長線上にあるプロジェクトでありたい。そう思います。

日比谷アメニス：毎日、市内の公園を巡っています



小金井市では2024年4月より、株式会社日比谷アメニスが、市内の公園を中心とした施設の管理運営を担っています。今回の整備の対象となった栗山公園・三楽公園・梶野公園もそうですし、地域に親しまれている環境楽習館や「はけと湧水」を生かした由緒ある滄浪泉園も含めて、その数、222施設。スタッフの方々が手分けしながら市内を巡り、それらの管理をしています（そういった業務の関係で、写真に映っているメンバーは撮影タイミングがあった一部の方々です）。「巡っている」ということは、お見かけする確率が高いということ。巡回してくれている人がいるということは、「顔の見える公園を目指す」ということでは、大切な意味を持つように思います。なお、小金井市内の公園情報をまとめたwebサイトでは、様々な情報が網羅的に紹介されています。今後、アクセシビリティ情報の掲載の充実化なども検討されています。

<https://koganei-parks.jp/>

こがねい子ども遊パーク：いっしょに遊ぼう



小金井市では、NPO法人こがねい子ども遊パークにより、「冒険遊び場（プレーパーク）事業」が進められています。舞台は梶野公園、東京学芸大キャンパスのいけのほとり、武蔵野公園のくじら山。3つのプレーパークのハード整備状況はまちまちです。だれでもトイレはあるものの遠かったり、凸凹道が続く場所もあります。ただ、「障害のあるなしに関わらず誰もが安心して遊ぶことができる環境を創出していきたい」という想いを共にしていることに変わりはありません。プレーパークの開催日等は是非ホームページ等でチェックを。

<https://www.koganei-yu.net/>

さわらび学童保育所：三楽公園の隣でスペースを開放しています



小金井市では、乳幼児や保護者のための「学童保育所子育てひろば」事業が進められています。三楽公園に面しているさわらび学童保育所もそのひとつ。目の前が公園という好立地の屋内スペースで、気兼ねなく遊んだり交流したりすることができます。さわらび学童保育所・所長の伊藤さん曰く、公園は緑豊かでカナヘビなどの生きものに子どもたちは夢中だそうです。写真は、公園に面している、学童保育所の庭での一コマ。大きなけやきの木がとても気持ち良いスペースで、木漏れ日が降り注いでいました。

梶野公園サポーター会議・花ボラの会：遊具は無いけど、花も、憩いもあります



小金井市では、市民と行政の協働により培われてきた公園の歴史があります。梶野公園もその一つ。「梶野公園サポーター会議」という市民ボランティア団体を中心となり、花壇の整備、遊び場づくり、犬の散歩マナーの見守り、「ターゲット・バードゴルフ」のサークルなど、様々な活動が推進されています。今回は、お花などの植物のケアをされている、花ボラの会の方々の活動日に撮影しました。遊具と言えるものはなにも無い。けど、だからこそ、それぞれの過ごし方ができる余白が豊かです。

小金井市立小金井第四小学校：出張授業で学んでいます



play hereの環境整備の舞台の一つ、三楽公園のすぐ隣には、小金井第四小学校があります。ということもあり、この小学校では継続的にplay hereによる出張授業の受け入れが進められています。題して「みんなの公園ってなんだろう?」。「みんな」というものの輪に入りづらい。そのような社会をどのようにより良くしていけるのか。それを、子どもたちが当事者の方々とともに一緒に考えています。地域「に」慣れる、地域「が」慣れる。あらゆる手段でそのような習慣をつくっていきたいと思いますし、公園はそのための舞台であるようにも思います。多様性はゴールではなく、そもそもの社会の前提。そう思います。写真は、出張授業を経ての再会が放課後の公園で叶っている様子です。同じ地域で暮らすもの同士として幸せな出会いを重ねていく。そのための社会のデザインが求められているように思います。

三楽会：根付いて広がる、愉快的気分



小金井にはシニアの方々が集い楽しむクラブが各地域にあります。「三楽会」は、その一つ。撮影したのは、グランドゴルフの日。それ以外にも、麻雀やカラオケなどで地元を遊びこなしているようです。笑う門には福来ると言いますが、そういう気分を持ち寄って、伝わり合って、広がっていく。なんだかとても素敵な地域だなと思います。

社会医学技術学院：地域とともにある理学療法や作業療法を



理学療法士や作業療法士を育成する社会医学技術学院は、小金井市と地域共生社会の実現を図ることを目的とした連携協定を結んでいます。そこでは、社会のつながりを醸成し、個々が抱える問題を解決する「社会的処方」という考え方が取り入れられており、さまざまな知見や資源を持ち寄ることで、地域共生社会の実現に寄与することが目指されています。公園を舞台に、楽しいリハビリテーションが広がったり、学生が学び合ったりしている。そのような状況が習慣になれば、なんだか公園の安心感も増すように思います。なお、「地域リハビリテーション」という言葉がありますが、そこでは「その人が住み慣れた地域で、その人らしく暮らす」ということが目指されているそうです。まさしく、play hereが目指す社会のあり方であるように思います。

出茶屋：梶野公園の木漏れ日の下、珈琲を飲みます



小金井市内で親しまれている珈琲屋台の出茶屋。現在は月に1回、梶野公園にも出店されています。炭火と鉄瓶を囲むように、小さな椅子も並べられていて、とてもくつろぐことができる空間が広がっています。梶野公園はフェンスで囲まれているため、道路への飛び出しの心配も大きくありません。新鮮な自家焙煎豆で淹れられた珈琲をのどかな梶野公園で味わう。なにをするでもなく、ただのんびりする。たまたま隣り合ったお客さんと世間話をする。それぞれの過ごし方とその重なりが自然と生まれます（詳しい出店日程等は出茶屋のInstagram等をご確認ください）。

<https://www.instagram.com/dechaya/>

インクルーシブ遊具：作り手と使い手の関係性を育みたい



公園は関係性を育む舞台でもあります。公園の使い手と担い手と作り手。さまざまな立場の関係が紡がれたり、或いは混ざったり。より良い公園や社会は、その先にある未来であるように思います。たとえば栗山公園には、車椅子のまま遊べる遊具や身体が安定が難しい子どもが楽しめるブランコがあります。使い手にとっては、作り手の想いを知る。作り手にとっては、使い手の想いを知る。そういった相互理解の機会は、第一に楽しいし、嬉しい。そうも思います。写真は、ブランコ型の遊具を医療関係者ともに開発した株式会社ジャクエツのみなさんが設置現場である栗山公園を訪れたときのもの。楽しいし、嬉しい。やっぱり、そう思います。







3. 公園は、なにもしないでも居られる場所です

公園は特別になにかをしなくてはいけない場所ではありません。そのなにかができたから良かった、できなかったからダメだったという気持ちにならないで済む場所です。ですから、「なにもしなくても良い場」として公園を捉えることも大切にしたい。例えば、そのときの風を、木漏れ日を感じる。風景をぼ〜っと眺める。それだけで十分であるようにも思います。

そこに、ただ居たくなる。そして、お金を払わなくても、そこに居ることができる。なにをするでもなく、ただ居ることができる。そのような場として、公園を考える。play hereでは、「遊具に縛られない遊び」というものを考え、いわゆるインクルーシブ遊具の設置だけにこだわらない、インクルーシブ公園のあり方を模索し続けています。それは、どのようなものか。きっと、みんなが躊躇無く、そして互いの存在を認め合いながら、ただそこで過ごすことができる場所。そういうものなんだと思います。



小金井みんなの公園プロジェクト

play here

ビオトープづくり ワークショップ

栗山公園の池をみんなで
人にも自然にもやさしいビオトープにしよう
(このことを通して、インクルーシブな社会にしていこう)
そのために、障害のあるなしに関わらずごちゃまぜになって
みんなでピクニックするところからはじめよう

日程：2026年1月18日(日)、2月1日(日)、2月21日(土)

時間：13時～16時

会場：栗山公園 小金井市中町2-21

対象：子どもから大人まで、どなたでも

定員：15組程度 / 事前予約制 [申込締切] 2026年1月9日(金)

*応募多数の場合は、「小金井市内在住・在学の方」「全3回を通じたご参加意向のある方」が優先となります。
また、抽選になる場合があります。ただし、できるだけ「ひらいた場」としていきたい。遠方からのご見学や、
または単発のご参加をご希望の方も是非、その旨をお申し込みフォームにてお寄せください。
*保護者同伴でのご参加をお願いします。子どもも大人もみんなでピクニック！
*年齢に制限はありませんが、駐車場の利用が可能です。
*園内の健康運動センターには、誰でもトイレがあります。また、ベッドのある医務室も多目的に利用できます。

公園を、障害のあるなしに関わらず誰もが自由に遊べる場所にもっとしていきたい。
ここで遊ぼう。小金井を、誰もがその想いを実現できるまちにしていきたい。play here
は、そのためのプロジェクトです。多くの方々の方々の声と力により、令和7年度は、3つの
公園(栗山公園・柳野公園・三楽公園)を舞台に、遊具やトイレなどの環境整備を進める
ことが叶いました。でも、それで終わりではありませんし、終わりにしてはいけません。
それらを「みんなで」望むものにしていくための活動が欠かせません。その一つが、
この「ビオトープづくりワークショップ」です。

主催：小金井みんなの公園プロジェクト「play here」
協力：社会医学技術学院 NPO法人東京学芸大学子ども未来研究所 栗山公園健康運動センター 日比谷アムニス

【お問合せ】小金井市環境政策課 緑と公園係 【お申し込みフォーム】
tel. 042-387-9860

play hereの事務局メンバーとともに、理学療法士や作業療法士を育成する社会医学技術
学院の先生や学生の皆さんが、小学校でビオトープをつくり活用してきた東京学芸大学の
先生と一緒により、ワークショップを進めています。



プログラムの考え方

このワークショップシリーズは、「ビオトープづくり」を目的としていますが、
それだけを目指すではありません。どちらかと言うと、「公園に来た方が遊ば
るきっかけになる」「そして、これからは継続的に遊ばせようとするための関わりをつく
る」【地域を舞台にした学び合いの場をつくる】ということを大切にしています。また、
冬季ということもあり、水に濡れる作業は避けて、まずは園心をお寄せくださった方々
と、温かいお茶を飲んだり、知り合いになったり、お話をしたり耳を傾けあったり
といった、一緒に過ごす時間を大切にしたいと考えています。ですので、ワークショップ
よりも、ピクニックとしたほうがしっくりきています(本格的なビオトープづくりの作
業は来年度を予定しています)。

もう少し言います。様々な人が集い、同じ作業をする。そういった共同作業を大切に
していきたいと思いますが、必ずしも、それだけでなくとも良いと考えています。途中か
ら参加する。途中まで参加する。途中でみんなとは違うことをする。そういった不揃い
も良いと考えています。何かご不明な点や気がかりな点等がありましたらお気軽
にお寄せください。みなさまの参加をお待ちしています。

基本的な流れ

- ① みんなで持ち寄りのお茶やお菓子を囲みながらおしゃべりする
- ② フィールドワークやワーク (テーマに基づいた散策やお絵描きや写真撮影)
- ③ もういちど、おしゃべりする

ピクニック気分でお越しください

ピクニック1：まずはご挨拶

1月18日(日)

このプロジェクトの趣意や想いの共有 / play here:期待することは? / どんな興味関心がある?
/ 栗山公園ってどんな公園? / 武蔵野の自然とは? / 参考にすべき事例って? / ビオトープがある
ことの意味とは?

ピクニック2：夢をふくらみたい

2月1日(日)

これまでのふりかえり共有 / どのビオトープにしていこうか? / どんな生きものに遊ばせてら
いたい? / ビオトープをつつた後に育むてどういふこと?

ピクニック3：夢を叶える方法も考えたい

2月21日(土)

これまでのふりかえり共有 / 使い手が親い手になるってどういふこと? / どんなお世話が必要?

4. 公園に、参加してみませんか？

障害があるとされている方々のために、というのはもちろんありますが、どちらかというと、「ともに」ということを大切にしたいと考えています。ばらばらでありつつ、同じ時間と空間を「ともに」する。まさに、公園はそのような舞台であるように思います。同時に、公園を「ともに」育むという挑戦もしたいと考えています。みんなが憩うことができる日陰をつくる、動植物も心地が良いビオトープをつくる。そういった実践も進めています。是非、ご参加ください（[play here](#)のインスタグラムや小金井の市報にてお知らせをしていきます）。

栗山公園では例えば、「ピクニックから始めるビオトープづくり」が進められています

栗山公園にはカルガモの親子が訪れる池があります。池とはいえ、コンクリート造の人工池で、動植物にとって居心地の良い環境とは言い難いものがあります。また、夏場には蚊の発生源になってしまう懸念もされてきました。そこで、その人工池をカエルやトンボも訪れるようなビオトープにしていく計画が、**play here**の一環として進められています。

play hereの一環とは、どういうことか。これらの構想を、障害のあるなしに関わらずみんなで実現していく。ひいては、障害のあるなしに関わらず、気兼ねなく公園で遊ぶことができる環境づくりの土壌にしておく。そのようなことを考えているからです。実際に、**2026年1月**から「ビオトープづくりワークショップ」が継続的に進められています。が、正直なところ、これらの活動をワークショップと言いたくない気持ちがあります。なぜなら、「求められる作業ができなかったらどうしよう」「途中からだったり、途中までだつたりの参加だと迷惑をかけてしまうかもしれない」「急な体調不良で行けなくなったら申し訳ないからイベントには申し込みづらい」といった懸念の声を当事者の方々から多くお聞きしていたからです。

そのような不安をできるだけ無いものにしたい。そのためには、どのような場であるべきか。「ともにある」ことはもちろん重要ですが、おそらく「みんなで・同時に・同じことを・同じようにする」ということに強くこだわらないほうが良いと考えています。逆に言うと、互いの気配を感じながらも「それぞれが・それぞれのタイミングで・それぞれの気がむくことを・それぞれのやり方でやる」ことができる場を目指しているということになるのですが、そうなってくると、どうもワークショップという言葉にそのような印象がないような気がしてきます。そこで、「みんなでピクニックするところから始めよう」と言ったり、「『ビオトープづくり』を目指すものではありませんが、それだけを目的とはしていません」と強調している次第です。

と、前置きが長くなってしまおうのですが、様子見でも見学でも大歓迎ですので、是非お気軽にお越しください。だれでもトイレが近く、駐車場もあります。なお、このビオトープは、スロープが造成されて、車椅子のままのアクセスがしやすくなりました。豊かな水辺をみんなで作って、生き物や季節の訪れをみんなとともに待つ。それが共通の話題になっていく。ビオトープと一緒に、地域の会話も育てていけたらと思います。

三楽公園では例えば、「土と遊ぶことができる畑づくり」が進められています

土と触れ合いたい。触れ合わせたい。と、思えど、なかなかそれを許してくれる環境がないのが実状です。そこで、三楽公園では、畑や菜園が整備されます。ただ、畑や菜園といっても、収穫が唯一のゴールというわけでもありません。収穫のためのプロセスこそを目的にしたいと思います。

どういうことか。収穫できたから成功、できなかつたら失敗。そうとも言えるのですが、それだけではない。その「それだけではない」ことを大切にしたいからです。どういうことか。「みんなが大切にしている苗や花を抜いちゃったらどうしよう」「みんなの農作業を邪魔しちゃったらどうしよう」といった懸念の声を当事者の方々から多くお聞きしていたからです。そのような不安をできるだけ無いものにしたい。そのためには、どのような場であるべきか。

栗山公園のビオトープのところで述べたことをここでも繰り返します。「ともにある」ことはもちろん重要ですが、おそらく「みんなで・同時に・同じことを・同じようにする」ということに強くこだわらないほうが良いと考えています。逆に言うと、互いの気配を感じながらも「それぞれが・それぞれのタイミングで・それぞれの気がむくことを・それぞれのやり方でやる」ことができる場を目指しているということになります。収穫が唯一のゴールではない、原っぱのような畑。じっくりゆっくり進めていきます。ご関心のある方は、是非お気軽にお問い合わせください。

梶野公園では例えば、「美味しい日陰づくり」が進められています

梶野公園は、「遊具がないことの豊かさ」が大切にされ続けている公園です。そして、だからこそ生まれる過ごし方や遊び方が豊かにあります。雑木林もありながら、ひらけた原っぱの空間の一角に、少し大きなパーゴラとベンチの空間ができました。その環境整備も **play here** の一環として行われたものです。

どういうことか。パーゴラの下ベンチは、人が寝っ転がれるだけの大きなスペースが設けられています。なぜか。「身体が不自由で動き回ることができないにしても、風がそよぐ心地よい空間で寝っ転がるだけでも楽しい、居たくなる」という声が多くあったからです。

パーゴラの足元には、地元の農家さんにアドバイスを頂きながら、キウイの苗を関係者のみんなで植えました。時間はかかりますが、じっくり育てていくことで、夏の強い日光を優しく遮り、木漏れ日をつくってくれる日除けになるはず。収穫が叶った際には、みんなでささやかなお祝いをして良いかもしれません。美味しい日陰づくり。じっくりゆっくり進めていきます。ご関心のある方は、是非お気軽にお問い合わせください。

5. 公園は、より良い社会のための練習場

公園は、より良い社会のための練習場。そう思います。そして、その想いを地域社会に広げていきたいと考えています。その際に、念頭に置いているものから2つの文献を選んでご紹介するところからこの章を始めたいと思います。続いて、**play here**でイメージしている「練習」の例を、**play here**のコンセプトムービーとともに考えていきます。**practice**という英語には、練習とともに実践という意味があります。より良い社会のための練習や実践の場。公園をそう捉えて、「みんな」で、経験や知見を持ち寄りながら活動を起こしていく場にしていきたい。それが、この本のキーメッセージです。

公園を社会のための練習場としてとらえること

「公民館は民主主義の訓練場です」

寺中作雄・監修 小和田武紀・編著「公民館図説」(全国公民館連合会)

戦前から地域振興や社会実験の場としての性格を帯びる施設は各地にあったものの、戦後に法制度が整備され全国に広がっていったのが公民館です。そして、その潮流を率いていた文部官僚である寺中作雄たちによって、その理念などを普及するためにつくられたのが「公民館図説」という図解入りの書籍です。それに目を通して「公民館は民主主義の訓練場です」というフレーズがあり、印象に残っていました(そのページには、続いて「文化交流の場です」「郷土振興の機関です」という言葉が連なります)。

民主主義の訓練。文化交流。郷土振興。そのための場や機関というものが地域に必要ということに異論を挟む余地はあまりないような気がします。今現在、そのような必要性を満たすことが地域社会において十全に叶っているかという心もとない気もしてきます。そのときに、人が集まる、または集まる可能性のある公園という存在の価値を改めて考えたり、最大化したい。そう思います。

「頼りない一人がおずおずと始めてしまったことを周りが受け止め、彼だけでなくその周りにいる人たちの声や、自分自身の内なる声に耳を傾けるなかで始まることもある。そうやって始まったことが、様々な形で反響を呼び、そしてかかわった人たちにとって大切な動きになっていく。頼りない<私>たちが、お金の力に頼ることなく、国や大きな権威にお墨付きをもらうこともなく、自分たちにとって生きることを励ます営みを生み出すこと、それを僕は<自治>と呼びたい。自治とは、誰かに支配され、コントロールされたり、誰かに所有され管理されたりはしない、自分やほかの生命を大切にしたいと思う<やさしき>から生まれる」

猪瀬浩平・著「ボランティアってなんだっけ？」(岩波ブックレット)

play hereは、地域にインクルーシブ公園をつくるプロジェクトではあるものの、インクルーシブ遊具を設置すればそれが叶うわけではない。とするならば、きっとこれは「地域づくり」として捉えた方が良いプロジェクトである。もっと言うと、「地域自治」を捉え直す営みであろう。そう考えてきました。どういうことか。自治とは、自分たちのことを自分たちでどうにかしていくという営みのことを指します。が、「じゃあ、その自分たち」とは誰のことかを問いていく必要がある。そう思うわけです。

「障害者の権利に関する条約」は、2006年に国際連合で採択され、日本では2014年に批准されています。世界中の当事者の参画により、その条約は策定されました。その際のスローガンの一つが、「私たちのことを私たち抜きで決めないで」というものです。つまり、ここで言う地域自治とは、まさにそのことです。

みんなで遊べる場所としての公園。みんなでどうにかしていくこととしての自治。その「みんな」の枠組みに入りづらい人がある。そのような社会のありかたを考え、変えていく。「障害者の権利に関する条約」の制定の際には、「(障害のある人を) 保護の客体から権利の主体へ」というスローガンもあったそうですが、まさしく、いつもやってもらう側に固定されるのではなく、当然の権利を発揮できる社会にしていくことが求められているのだと思います。

ただし、自治という言葉には、熱く・強く・硬い印象がつきまとうような気もしています。そうではない自治の捉え方もあるはずです。その際に、「頼りない一人がおずおずと始めてしまったこと」も含めて、「自分たちにとって生きることを励ます営み」を自治と捉え、それを「自分やほかの生命を大切にしたいと思う<やさしさ>から生まれる」とする、文化人類学者であり自身も埼玉の見沼で福祉農園を運営する猪瀬耕平さんの言葉には、随分と支えられてきていますし、その感覚を共にしたいと考えている次第です。

play here が考える「練習」

play hereのコンセプトムービーは、play hereのコンセプトイベントである「栗山公園のんびりデー」の様子を中心に制作したものです。そこでの風景は、「こう、あったらいいな」という未来が、少し先取りされて実現されているようなものでもありました。

その様子や雰囲気は、是非コンセプトムービーをご覧になっていただければと思いますが、ここでは「栗山公園のんびりデー」を例にあげながら、play hereが考える「練習」についてご紹介していきます。

[play hereのコンセプトムービーは、小金井市の公式You Tubeアカウントにて公開中です]



https://youtu.be/xArwGVbH_JY?si=56zAzVIN_s9O34fQ

- 「持ち寄り」の練習

この書籍でも繰り返しご紹介している、「障害者の権利に関する条約」の制定の際にあった「（障害のある人を）保護の客体から権利の主体へ」というスローガンは、「『ために』よりも『ともに』」と捉えることができるように思います。もっと言うと、同じ権利の主体同士として、「ともに事にあたる」こと。それを、**play here**では大切にしたいと考えています。「栗山公園のんびりデー」を含めて、**play here**はまさに、その練習の機会。当事者の方々を含む関係者の方々と共に事にあたることを念頭に入れています。その際に意識しているのが、みんなで経験や知見やアイデアを持ち寄ること。より良い地域社会は、そうすることで出来上がるものだと思います。

- 「まず、ちいさくやってみる」の練習

嚙下障害の方のためにブレンダーを設置して、みんなで同じものを食べることができるようにしたい。肢体不自由の子どもたちのための遊びを工夫したい。精神障害や知的障害があるとされている子どもたちにとっての居心地をより良くしたい。障害があるとされている子どもたちが、お客さんではなく、ショップの店員さん側として関わられるようにしたい。「栗山公園のんびりデー」では、まさに様々な経験やアイデアが持ち寄せられ、そして、それらを小さくてもやってみるということで、より良い状況を拓こうと努めてきました。そのときに重要だったのは、（もちろん安心安全面への配慮は徹底しながら）いきなり完璧は目指さなくても良い、まずは顔の見えるところから、といった心構えだったように思います。

- 「ごちゃまぜ」の練習

公園に行くと白い目で見られるので行けない。これは、多くの当事者の方々から寄せられている声です。普段からお互いに交わる機会がない。だからお互いに慣れない。その「慣れなさ」が、そういった「白い目」を生んでいる一つの要因であるようにも思います。「栗山公園のんびりデー」では、多くの当事者の方々が足を運んでくれました。そして、めがけて来てくれた方々以外にも、たまたま遊びに来たり立ち寄ってくれた方々も。いろんな理由やきっかけで、同じ場所に居る。そうして、子どもの頃からごちゃまぜになって一緒に公園にいる。とくに、言葉を交わさなかったとしても、お互いの気配を感じ合う。公園は、そのような機会を創出する場であるように思います。

公園でイベントをしたくなったら！？

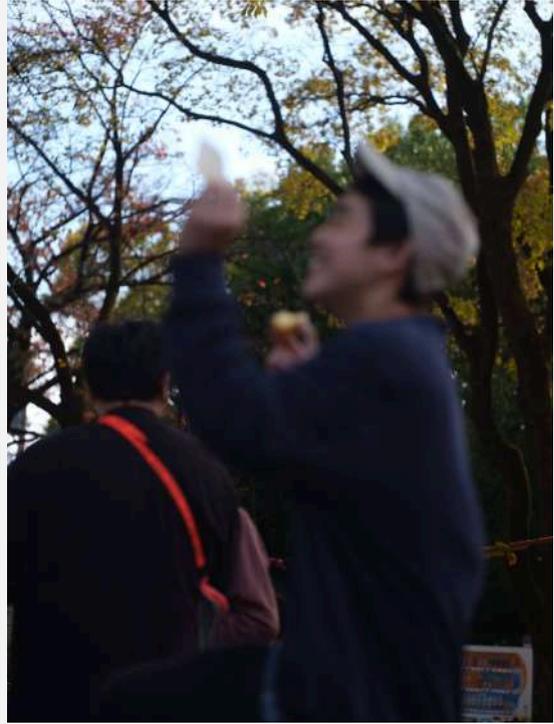
公園は、より良い社会のための練習場。同じ悩みや困難を抱える家族が集まる家族会やPTAや福祉団体等、何かのコミュニティで公園を活用することができます。その際に、公園の一部を貸し切って行うイベントも、地域の公共性に沿うものであれば、申請をすれば実現することが可能です。

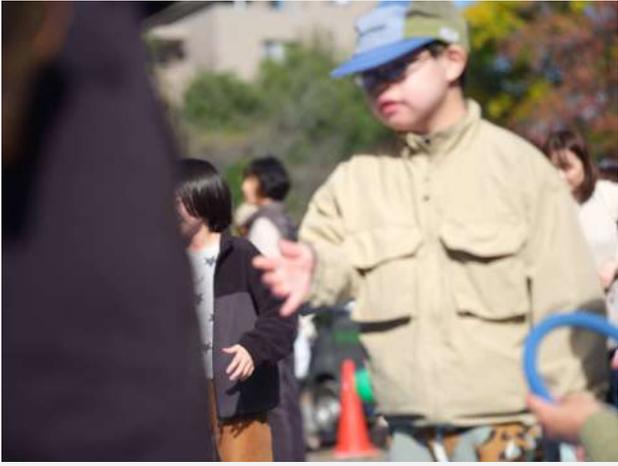
公園は、地域の大切な資源。なにか思いつくものがあれば、是非相談してみましよう。

小金井市環境政策課緑と公園係

tel : 042-387-9860

mai : s040199@koganei-shi.jp





6. 知ってもらいたい、「障害の社会モデル」という考え方

インクルーシブ遊具があったとしても、「心のインクルーシブ」がそこに無ければ、行けない。これは、多くの当事者の方々から寄せられている声です。では、どうするべきか？

例えば、地域の小学校での出張授業、地域の公園を担っている各種地域団体の方々との連携、市役所内での部署を横断した協働など。play hereではハード整備以外の取り組みも拡充し、そのための構築すべき仕組みを見出したいと考えています。その際に、念頭に置き続けているのが、「障害の社会モデル」という考え方です。

「障害の社会モデル」（以下、「社会モデル」とは、障害のある人が制限や不利益を受けるのは、その人の心身の損傷（機能障害）のせいではなく、「多数派に合わせて社会がつくられてきたために、さまざまな社会的障壁（社会のバリア）があるから」と捉える枠組みのことです。（中略）なぜ「社会モデル」を知ってほしいと思うのか？ 三つの理由を挙げてみます。

まず、実際的な理由として、二〇二四年四月に法改正された「障害者差別解消法」において、事業者にも義務化された「合理的配慮」を理解するには、「社会モデル」の理解が不可欠だと思うからです。「社会モデル」を知らないままであれば、合理的配慮に対する誤解—「障害のある人に何かしてあげること」「思いやり」「特別なサービス」「優遇」……といった誤解もなくならないと考えています。

次に、障害のある人が直面している様々な差別（理不尽な状況）を、「そういう障害があるから、しかたない」ではなく、「多数派中心の社会側がバリアをつくっているせいで」起こっている問題だと捉え、バリアに気づく人やバリアをのぞくために行動できる人が増えて欲しい、という理由です。バリア（社会的障壁）は、少なくとも減らして行くことができるものです。

三つめは、マイノリティが声をあげ、さまざまに取り組んできた結果、「社会モデル」の考え方をベースとして「差別を禁止する」法律ができた、という事実が、他のマイノリティに属する人たちをカづけ、変化に繋がってほしいと思うからです。

松波めぐみ「『社会モデルで考える』ためのレッスン —障害者差別解消法と合理的配慮の理解と活用のために」（生活書院）

「『社会モデルで考える』ためのレッスン」。play hereは、まさにそのためのレッスンでありたい。そう思います。どういうことか。例えばそれは、「障害」「障がい」「障碍」のどの表記を選ぶかかという検討や判断にもつながります。どういうことか。障害とは、その人の側にあるものではなく、社会の側にあるもの。であるからこそ、そのバリアとも呼べる障害を社会的に取り除きたい。それがまさに「社会モデル」的に考えるということだったりします。play hereでは、そのような思いから「障害」という表記を用いるに至っています（実際には、色々な表記が交ざっているのが実態ではあり、それも良しとしたい気持ちもあります）。

大切に思うので、繰り返します。社会の側にある障害を社会的に取り除きたい。どういうことか。障害者差別解消法（以下、解消法）について、松波さんは「『障害者に親切にしましょうキャンペーン』ではない」と言います。「『〇〇障害の人をどうお手伝いするか』ではなく、もっともっと、「社会のあり方」の方に関心を向けてほしい」と言います。そのとおりだと思います。解消法に先立って、「二〇〇六年の国連総会で採択された障害者権利条約のキャッチフレーズは『（障害のある人を）保護の客体から権利の主体へ』だった」と紹介されているように、共に等しく権利を持つ人同士として、そして、共により良い社会を目指す人同士としての関わり合いから事にあたっていくことが必要だと思うからです。

目の前で困っている人がいたら手助けをするというのは、もちろん言うまでもなく大切なことですが、話をそれで終わりにしない。そもそも、公園や地域に出づらく、その「目の前」にすら来られない人がいる。そうも思います。ですし、「暫定的健常者（ダン・グッドリー『障害から考える人間の問い』より）」という言葉にもはっとさせられましたが、助ける・助けられる、教える・教えられるという役割は常に暫定的で固定的ではなく、入り組んだり入れ替わったり変化するものであるとも思います。

ところで、より良い社会を目指したいと素直にそう思いますが、そういうときにいつも頭に浮かぶのは、福沢諭吉がsocietyという英語をもともとは「人間交際（じんかんこうさい）」と訳していたというエピソードです。なので、言い換えます。より良い「人間交際」を目指したい。この書籍では社会学者のケイン・樹里安さんの「マジョリティとは、気にせずにする人」という言葉が引かれていました。う〜ん、唸り、言葉を失うものがありますが、この「気にせずにする」と「気にせざるを得ない」が交差しながら、より良い「人間交際」をしていく。万能な答えは無いし、最初からスムーズなことも無いと思います。が、それが良いとも思います。だからこそ、ごちないながらも、出会い続け、会話し続け、考え続け、行動し続けていく。play hereはそうありたいと思っています。



おわりに：終わらせないための工夫をすることが、まちづくり

区切りはあれど、終わることがない。むしろ、終わらせてはいけないプロジェクト。play hereを進める中で、そう思いました。これさえやれば事が済む。そのようなものがないからです。やるべきことを挙げていくと、キリがありません。息切れしそうにもなります。他方、当事者の方々や地域の方々から、「play hereは、すごい素敵なんだけど、担当者が異動しても続けられるの？」という声も多く届いていました。それも、その通りに思います。

はて、さて、どうする、どうしたい、どうすべきか。情熱で始まり、情熱が持ち寄られて深まり広がりつつある。play hereはそのような側面がありますが、情熱を大切にしつつも、それに依らず、市の仕組みとして、そして地域の習慣として定着していくための試みも様々にしています。それも、play hereがインクルーシブな公園をつくるということを通してまちづくりの取り組みであるように感じるから。そして、それらを終わらせないための工夫こそが、求められているようにも思うから。

そこで、担当の小林勢さん、共同ディレクターの飯石藍さんとともに、公開作戦会議的に語り合った様子をご紹介します。



小林勢（小金井市環境政策課緑と公園係）：2023年度にplay hereの前身となるプロジェクトを立ち上げ、市内の公園担当でありつつも福祉施策的な性質を持つこのプロジェクトの庁内連携を推進しながら押し進めている。本文中でも語られているが、小林さんは長い剣道歴を持つ。



飯石藍（公共R不動産シニアマネージャー兼編集長／株式会社nest取締役など）：公共空間の活用を中心とした、官民連携のまちづくりを全国で展開する。2025年度から、play hereの事業母体は「公共R不動産」を運営するOpen Aとなっており、飯石さんはplay hereの共同ディレクターとしてプロジェクトを推進し、全国の先進事例やそこでの知見との橋渡しを果たしている。



熊井晃史（写真右／GAKU事務局長／とをが主宰など）：2024年度から参画し、地域で暮らす生活者や当事者の保護者という立場もありつつディレクターとして、play here というネーミングやコンセプトや構想を改めて練り上げるところから行った。本書の執筆や編集やたまに写真撮影も務めている。

まだ始まってないし、成功したとも言えない

熊：play hereは、新聞やテレビでも取り上げて頂いたり、第1弾のコンセプトブックも1200部という数量がしっかりと重みを持ったまま広がりつつあり、感謝とともに手応えを感じてはいるものの、まだ始まっていないという感覚が色濃くあるんですね。

小：ハード整備もまだ終わっていませんからね。

熊：そうなんですよね。現在進行形でまさにこの第2弾のコンセプトブックをつくりながら、その原稿を小林さんと飯石さんに読んでもらった上で、席を設けているという2026年の正月明けです。

飯：賀詞交歓会からの、今です。

熊：それ、耳でずっと聞いていて、お菓子の交換会かと思ってましたわ。

飯：ぜんぜん違う！

熊：ということ、さっき知りました。

飯：play hereは、スタートラインちょっと手前ぐらいだよな。

熊：そう、やっところまで来たなというのと同時に、まだまだこれからだな、という。なんとしてでも成功させたい。じゃあ、その成功って何なの？って考えると、これまで公園に行きづらさを感じていた子どもたちやその保護者の方々が、行きやすくなるということだし、それによって地域社会における生きづらさのようなものが少しでも軽減するという。そう思うんですね。

小・飯：そうですね。

熊：そのためには、いろんな不安や気がかりにに応じていく必要があると思うんですけど、うまくいきつつあるプロジェクトでは必ず懸念としてあがる「担当者が変わっても続けられるのか？」という問いを、**play here**においてもたくさん投げかけて頂いている状況ではあります。ですから、今が「良い感じ」だとしたときに、その良い感じをどのように持続可能なものにしていこうとしているのか？という考えを、ここで少し深掘りしたり、お伝えしていく機会にしたいなとも考えています。

託された人が困らないようにしておく

小：どんな仕事でもそうなんですけど、後の担当者が困るような仕事の仕方はしたくなくて、困らずに、かつ円滑に進められるような仕事の残し方をしたいなと思っていたので、そのために今できることは何かって考えたんですね。まずは、その想いや基本的な考え方をまとめたガイドラインを作ること。そして、庁内の連携なくしてこのプロジェクトはうまくいかないと思ったので、関係部署を横断して課長級の方々からなる会議体を作らせていただいて、継続的に意見交換しながらこのプロジェクトを高めていくというか、温めていくという。

熊：ガイドラインは、**play here**の公式サイトでも公開されているので、是非いろんな方に見てもらいたいです。

小：そうですね。庁内向けではありますが、広く市民の方々にも知ってもらえたら嬉しいです。ハード整備をした後でも、解決すべき課題が完全になくなるわけではないですし、時代によって取り組むべき課題のあり方も変わっていくと思うんですね。公園が作って終わりではないように、ガイドラインも作って終わりにはしてはいけません。ガイドラインも必要に応じて更新していく。庁内の関係部署同士の会話を終わらせないようにしていく。そういう動きをつくっていきたいところです。

熊：まさにですね。

小：あと、200を超える公園を小金井市では指定管理者が一元的に管理をしています。単年ではなく5年間という比較的長い契約期間を設定しているので、そういった公園を担う事業者の方々とも連携も深めていきたいと考えています。

熊：公園を公共的なインフラと捉えて、それをどうより良いものにしていくのか。これまで当事者の方々や市民の方々や関係事業者の方々との連携を模索してきましたし、多くのお力添えを頂いています。個人と事業者と行政が連携していきやすい仕組みをつくっていくというところですよ。公園のような公共領域における「官民連携」といったキーワードは、近年強く謳われていますが、その分野に詳しい飯石さんはこの動向をどう見ていますか？

飯：公園も学校も、既存の公共施設は既存の専門領域を担う組織が管轄して運営されていますよね。例えば公園は、日々の維持管理としては植栽管理が中心だった時代が続いていたけど、**play here**のような、例えば福祉的なものがテーマに入ってきたときに、これまでの所管・テーマだけでは対応できないんですよね。

熊：ワンイシューという言い方がありますが、そのようにして論点や課題が一つに絞られているわけではなく、複数に渡って絡み合っている。つまりワンイシューでは済まない。となると、一つの課題に対して一つの部局をあてがっておけば事がうまく進むというわけでは当然ない。**play here**ではそんなことを考えていました。

飯：そう。そもそも今がそういう時代だよね。公園で言えば、清掃や植栽剪定のような維持管理の仕事と、公園を場として多様な人と人の関係を育てていくような共生社会を目指す仕事では、仕事のゴール設定も、必要な判断の軸も運営の仕組みもまったく違うんですよね。



絡み合った複雑な問題に対しては、こちらも絡み合って対応したい

熊：問題が複雑だ。複雑というか絡み合ってるから、絡み合ってる問題に対応するためには、こっちも絡み合っておく必要があるぞ、みたいな。いわゆる「縦割り」だと事が進まんぞ、みたいな。

飯：そう。絡み合わなきゃいけないし、それぞれの課によって目指すものや目指し方というものはあるって、それはそれで大切にすべきことなんだけど、それをいろんな部局が理解し合った上で、本当に成すべきことが何かということをしり合わせていく土台をつくることをしない限り、課題の本質的な解き方ができないということは日々感じています。だから、ガイドラインができたことが素晴らしいというよ

りも、ガイドラインをつくるプロセスのなかで、いろんな課の人が関わりを持つことが必要で、例えば福祉系の部局が公園をどのように活用していけるかの具体的な施策につながるアイデアを整理して提示しているところに意味があるんだと思います。

熊：そうそう、小林さんは小金井市で言うところの環境政策課で、あくまでも公園の管理担当なんですよ。福祉領域の担当ではない。

飯：ですよ。だから、公園という地域の公共空間を土台に、庁内連携も育てていかないといけない。なので、play hereでも度々「公園は、より良い社会のための練習場」って言っているわけですよ。

熊：もう念仏のように唱えるようにしています。

飯：行政の中でも、受け止めてもらいたい良いフレーズで。

熊：気に入っています。

飯：政策的なことを含めて、いろんなテーマを乗せやすい公共領域が公園というフィールドなんだと思っています。他の課の人も、自分たちが持つ課題を自分たちの施設だけじゃなくて公園で実践してみたらどうなるだろうって思って練習してみてもらえたら、それもまさに庁内連携の第一歩じゃないですかね。

人間同士であることの回復

熊：まさにですね。ガイドラインとか庁内連携会議とか、プロジェクトをより良く持続可能なものにしていくために、いろんな施策を押し進めているわけですが、「公園を活用してみようかな？」という気持ちにみんながなっちゃえば、それで事が済むというか、それこそがゴールという気がします。「その気になる」ということがとても大切な気がしているんですが、どうやったらその気になることが叶うんですかね？

飯：やっぱりこう、誰かの幸せそうな様子や風景が見えるっていうことが、とても大事な気がしてて。結構多くの自治体でよく言われていることですけど、行政職員が直接対峙しているコミュニケーションって、クレームのようなことが多いでしょう。

熊：公共サービスを含めたインフラというものは、上手くいって当たり前な存在として認識されているので、褒められたり感謝はされないけど、ほころびがあったときに、怒られるという。

飯：そうそう。だから、行政職員自身も、やって良かったと思える実感がなかなか得づらいついていうことがある。だから、小さなことでもトライして、それに対して当然反省もあるかもしれないけど、良い反応も返ってきて、感情が蓄積されていくと、頑張れるんじゃないかなと。

熊：「感情の蓄積」って気になるフレーズだな。感情という、贈り合われて養われる資産。人間だもの。

飯：そう、みんな人間じゃん。

熊：ですよ。ポール・ラングランという「生涯学習」という概念をつくり普及した人がいるんですが、その人の本を読んでいたら生涯学習というものを、「われわれが『人間同士』である、あるいは『人間同士』である状態を創造あるいは再創造することを目指すもの」としているんですね。

小：あの一、play hereがあるから小金井市で働きたいと思ったと言う若手職員が出てきているんです。それも、複数。

熊：大きな成果として捉えています。

飯：ほんと、そうだよ。

小：人間同士ということと言うと、いろんな人が意見を言いやすかったり、乗りやすいものにしていくことが重要ですよ。ときには固い会議も重要ですが、もっとやわらかく気軽なコミュニケーション機会も作っていかないと、「その気になる」ということは、なかなか生まれえないと思うんです。

熊：基本的に行政機構というものは、不平等や不公平があってはならないので、「誰がやっても同じ結果になる」ということが求められるものではありませんよね。

小：はい。

熊：それは引き続き社会システムとして重要ではあると思うのですが、ただ何か新しい意味や価値を生んでいくというタイプの仕事になってくると、その人の人間性が問われていくのは当然ですし、そういった人間性が現れやすい機会の創出を仕組みとして担保していくということも同時に求められている。そのようにも思います。

顔が見えるということ

熊：play hereを立ち上げていくときに、これは欠かせないなと感じたことの一つに、こちら側の顔が見えるものにしていくというのがありました。なので、チラシやInstagramでどんどん小林さんも含めて、こちらの存在を出していく。当事者の方々や関係者の方々が、その存在を表に出してくれてお話をしてくれているのに、こちらが匿名な存在であるわけにはいかないという気持ちもあったんですが、いずれにしても、行政職員の顔と名前がオープンなものになっていくということが、今回のケースでいうととても大事だなという感覚がありました。

飯：大事だと思う。

熊：ですよね。なんですけど、そのやり方がとても小金井市では珍しかったらしいんです。

小：珍しいと思います。まさに今いますが、ここ（熊井の小金井市内の事務所兼本鼎談の収録会場）に **play here** を始めるにあたって直談判に来たじゃないですか。

熊：まだこのプロジェクトに関わる前の頃ですね。 **play here** という名前をつける前。

小：はい。それで「やっても良いですけど、小林さんも一緒にプロジェクトの顔になって、いろんな批判も含めて受け止めてもらわないと自分は関われないです」って言われたことが記憶に残っていて。

熊：うわ、言いましたね。やばい。今聞くと、やばい。すごい偉そう。

小：「そちらに覚悟があるんだったら、この仕事を受けます」って言ってくれて、その覚悟をしたの、ここですよ。

飯：それ言われて、どういう気持ちだったんですか？

小：まあそれぐらい腹をくくらないと、やりきれるプロジェクトじゃないなとは思ってはいましたし、熊井さんに頼むのであれば、それくらいのことだとも思っていました。熊井さんも、それなりの覚悟を持って引き受けてくれようとしていたので。

飯：互いの腹のくくりがそこであったわけですね。めっちゃ大事な日だったじゃん、それ。全てが始まった日だね。

熊：メールを頂いていたのに、全然返さなくてね。それで会いに来てくれたんですよ。わー、もうそれが二年前？

小：そうです。

飯：そういう覚悟がないと、このプロジェクトが体を成さないと思ったんだね。

熊：ですし、下手なことをやると地域を歩けなくなるじゃないですか。市内に事務所も構えて、その地域で暮らしてもいるわけですから、生活者としての顔もあるわけですからね。

飯：その緊張感は大事ですよ。

「持ち寄って成り立たせる」ことの練習

熊：腹をくくりあうための儀式のようなものの必要性は考えてはいます、それは、属人的であるのと同時にそれをどう仕組みにしていくのかという議論とも重なっていく気がするんですね。

飯：属人的に情熱で始まるのが一番正しい形であるとは思いません。特にその始まりの火が着いた時って熱量が高くなりやすいじゃないですか。なんだけど、ふとこう、担当者が別の人になったとか、変わらないにしてもその人のライフステージが変わったとかで、その熱量が下火になることもありますよね。だから、特定の誰かの熱量に依存しないで、それぞれがそれぞれの言葉で語られている状態にあることが重要ですよ。

熊：「それぞれがそれぞれの言葉で語られている状態」って良いですね。特定の熱源や語り方に依存しないという。

飯：それぞれが持っている大切なことがあるからね。ガイドラインだって、つくった時の熱量は高いだろうけど、その熱にあたらぬまま資料だけ読んでもねえ。だから、その人の熱が発揮されることが大事でしょ。

熊：今道友信という美学者が「文化は受け取られる情報ではなく、自ら燃え立つ力である」って書いていました。

飯：情報を受け取れたかどうかというのももちろん問われるけど、自分自身のこととしてどれだけ考えられるかってね。

熊：そうなってくると、それぞれの火が持ち寄られたら良いよね、という話になりますよね。 **play here** って、ほとんど「みんなで持ち寄って成り立たせる」ということの練習だなと、ホント思っていますし、そういう練習が今の社会でめちゃくちゃ必要だなということは、何度でも繰り返して言いたい気持ちがあります。

飯：だね。

位置づけという仕組み化

熊：プロジェクトをより良いものにし持続可能なものにしていくためには、意味と意義と位置を持つておく必要があると考えているんですね。意味や意義というのは言葉のとおりだとして、位置というのは、行政機構や地域社会における位置づけ。どういうことかと言うと、例えば「公園を地域社会におけ

る有意義なメディアとして位置づける」というplay hereで議論をしてきて、ついに実装されるものがあります。それは、今回のコンセプトブックでもあまり触れることができていないので、言及しておきたいところです。

飯：公園に設置予定の掲示板的なインフォメーションボードの設置のことですね。

熊：そうそう。市内のplay here的な情報を各所から集め、多くの人が目にする公園に掲示する。公園がそのような位置づけを明確に持てば、役所内の連携をすることの意味もより明確になっていく気がするんですよ。どんな情報を、どのように届けていくのか？ということを考えることから既にコミュニケーションって始まってますからね。

小：この本にも書いてありますが、「地域の習慣として定着していく試みにしていきたい」という表現がいくつか出てくるじゃないですか。そこに行けば学べるし、情報もとれるっていうことで、公園に行くきっかけにもなるし、チラシを集めたり貼ったりするプロセスの中で市の職員同士がコミュニケーションを取る理由にもなる。そういうことを習慣にしていきたいですよ。

飯：そこ、がんばりたいですよ。

熊：扱う言葉を豊かにして、関係を育んで、習慣にする。もうね、習慣がつくれますからね、社会を。

挨拶という他者との架け橋

飯：やっぱり本当に、公園そのものがメディアだと思ってるんですよ。メディアって、いろんなものの媒介という意味もあるじゃないですか。それで、媒介で言うと、最近大事だなと思っているのは挨拶。人の存在が匿名化されていたら挨拶ってできないじゃないですか。

熊：挨拶とは、顔が見えている存在同士ですもの。

飯：そう。意見が合っているかどうかはおいておいても、まずはちゃんと挨拶が生まれているということが大事で、シンプルだけど、意外に難しくないですか？

熊：そうですね。同じ地域で暮らす者同士であると同時に、異なり合う存在同士でもある。挨拶はその架け橋。

飯：うんうん。

礼がないと始まらない

小：長く剣道をやってきたのが、いろんなことに通ずるなと思っていて。「礼に始まり礼に終わる」って良く言われていますけど。

飯：礼に始まり礼に終わりますね。

熊：ああ、お二人とも剣道経験者ですもんね。

小：剣道で、「気剣体（きけんたい）」ってあるんですね。

熊：へー、聞いたことないです。

小：それが揃わないと、一本にはならないんです。

熊：はあ。

小：心構えと技術と体さばき。相手に剣を当てたとしても、次を打てる姿勢になっていないと一本にはならないんです。

熊：常に次を生む流れのなかにある。

小：「残心（ざんしん）」と言います。

飯：気を抜いちゃいけないんです。

熊：ある意味、終わりがありませんね。

小：持続可能性のなかにあるんです。

熊：うわ、つながる。え、ちょっと待てよ。相手に剣が当たったところで一本じゃないんですか？

小：違います。打った後に、次の技につながる体さばきができたとこで、一本です。

飯：そこまでちゃんと所作として整ってないと旗が上がらないわけ。

熊：うーん、すごい。

心の内面を問わないものとしての仕組み

熊：挨拶とか礼というものを、少し別角度から解釈を与えておきたくなっちゃったんですが、なんと言いますか、行政施策において人間の内面にまで踏み込むことの正当性がどこまであるのか？というところに関しては、わりと冷静でいたいタイプなんです。共生社会なるものを考えるときに、相手を思いやりましょうといった共感ベースなものに意味を置きすぎると、それはそれで怖い。それこそ、飯石さんが言っていた「それぞれがそれぞれの言葉で語られている状態」ではなくなる。そうしたときに、考えや感じ方が違うなっていう他者に対しても、或いは、なんなら苦手とか嫌いという感情があったとしても、そういった内面は問わずに、礼節や挨拶というものは交わしておきましょうねというような作法というものを社会の習慣や仕組みとして考えていったほうが良いと考えているんです。剣道の世界でも、相手のことが気に食わないから試合で礼をしないということはきっと許されないですよ。それこそ、内面の話ではない。

小：礼がないと、そもそも始まらないです。

熊：なるほど。としたら、世の中には始まってないことのほうが多そうですね。

飯：そこに、礼も挨拶もないから。

小：それだと、始まらないです。

ハードとともに、コミュニケーションを整える必要

飯：インクルーシブ公園というものをつくるっていうときに、ハード整備だけじゃなくて、結局コミュニケーションも整えていく必要があるということですよ。

熊：「コミュニケーションを整える」か。そのフレーズも面白いですね。

飯：あのさ、今回の原稿も読ませてもらっても思ったけど、このコンセプトブックも、まさにそのためのものじゃないですか。

熊：です。まだ途中ですけど、読んでみて、どうでした？

飯：染みた、染みた、染みた。みんなさ、見えてなかったり、気がついていなかったことで、逆に言うと、見えたり、気がつくことができれば、じゃあ、より良い地域社会にしていくためにはどんなことが必要だろうか？って考えられるし、そういう想像力を刺激したくもあるじゃない。

熊：ですねえ。生きづらい社会があるとして、じゃあ、それが誰かの悪意によって出来上がっているかという、必ずしもそうではなくて、見たり知ったり考えたりする機会がそもそもないという。その意味でも、ハードだけではなくコミュニケーションを整えるというのは言い得て妙だし、そういうところに、行政施策のカロリーが注がれていくことが当たり前になったらいいなとも思います。

飯：うんうん、まさに。

熊：play hereのコンセプトイベント「栗山公園のんびりデー」でも、多くの当事者の方々とお話する機会がありましたが、かなり多くの方が「今日は謝らないで済んで遊べています」って。

飯：でしたね。

熊：「普段は、すみませんすみませんって、ずっと謝ってる。だから、公園に行きづらい」っていうね。それはつまりコミュニケーションが整っていない、という捉え方ができるわけですよ。

飯：ハードとソフトの両面での整備という言い方もありますけど、それをそういうこととして考えていく必要がありますよね。

歴史の延長線上にある希望

熊：小林さんはどうでした？現状の原稿を読んでみて。

小：第一弾のコンセプトブックでは、このプロジェクトなら良い変化を起こせるかもという希望をもってもらえたかなという手応えがあったんですね。それで、今回も希望を感じられるものにしたいと思うのですが、原稿にもありましたけど、その希望が「歴史の延長線上のものである」ということも、まあ、とても染みていて。どこからか降って湧いたような突飛なプロジェクトだと、その歴史の延長線上ということにはならないですし、地域に浸透しない。地域に浸透しつつ希望のプロジェクトになって、インタビューに応じてくれた方々、当事者の方々、地域の方々が、やっぱり小金井に居て良かった、住んで良かった、これからも住み続けたいって思ってもらえるようなまちづくりに、このプロジェクトが貢献できると良いなと思っています。

熊：ですよ。歴史の延長線上というのは、例えば剣道をやってきた小林さんと飯石さんの人生というものの歴史の延長線上ということでもありますし、地域を担ってきた様々な人のはたらきの歴史を踏まえたものにしたいということでもあります。人にも地域にも、歴史あり、という。歴史に根ざされた未来というものがあるはずだし、もっと言うと、どのような歴史にどのように根ざすべきか？という話だってあるはずですよ。



管理ではなくマネジメント

飯：持続可能な仕組みにするための考え方として、なんかすごい言いたいことがあって。

熊：言って言って。

飯：やっぱり人だな、って。

熊：おお。

飯：というのも、公園で言うと、言葉としては「公園管理」という言い方でそれこそ維持管理がされてきたじゃないですか。一方で、最近は、「管理からマネジメントへ」と謳われている。公園をどのように地域社会で役立てていくか？そのための働きをなんて呼ぶのか？という議論があります。それこそ「コミュニケーションを整える」という話にもなってくるんですが、そうしたときに福祉や教育領域の人が公園を舞台に働いていけるような仕組みを作れたらなと思うんですよね。公園って、いろんな人が居れる場所だし、ちょっとした困りごとを相談したりしやすいじゃない。これまでは、そういう福祉的な人が公園のマネジメントに関わってるケースってあんまりなかったと思うんですよね。その意味で言うと、**play here**が、理学療法士や作業療法士を育成している社会医学技術学院と連携しているということも、そういった未来に向けた仕組みづくりのためのきっかけとして、希望だなと思っているんです。

熊：ハードとコミュニケーションの整備を両面で進めていくと考えると、やっぱり人の存在というものは欠かせないですよね。ところで、マネジメントって意味的にもコントロールではないというところが重要なんですよね。**manage**を英英辞典とかでひくと「do something difficult」「deal with problems」み

たいな感じで、「難しいことをどうにかこうにかなんとかする」というニュアンス。決して管理ではない。だから、みんなでこの社会をどうにかこうにかしていくことの舞台として公園を捉えるという感じが必要なんだろうなと思います。

活動そのものがアーカイブ活動

熊：それでまあ、最大の仕組みが人という側面があるなどは思っているんですね。ちょっと言葉を変えると、アーカイブとも言えて…。つまりplay hereの知見がどのように蓄積され、そして発展していくのか。もちろんガイドラインや庁内連携会議や情報を伝えるメディアとしての仕組みとか色々あるんですけども、最終的には人が育ち合う機会の創出を仕組みとして捉える視点が欠かせない。例えば、神社の隣に鎮守の森があって、その森の木を使った建物が仮に破損していなかったとしても何十年に一回とかで作り直すじゃないですか。つまり、それは宮大工さんたちの技術継承の機会ではあるわけですよね。

飯：式年遷宮とかですね。

熊：そうそう。だから、その営みそのものが、アーカイブだったり教育だったりの機能を持っている。そういう意味や意義や位置づけがあるわけじゃないですか。持続可能性を考えた、社会的な仕組みだなと思うんです。

飯：まさに、まさに。

熊：昔の人って、凄いなとも思うんですが、play hereもハード整備で終わらせないで、みんなでビオトープをつくろうよとか、キウイを植えて日陰をつくろうよとかってやろうとしているのは、ある意味、風呂敷をひろげてしまえば小金井という地域で、そういった式年遷宮的な営みをつくろうとしていると言えなくもない。

飯：うん。

熊：でき、極端な話をすれば、そういう営みが習慣として確立されれば、小林さんも僕らも含めて、メンバーが総代わりしたとしても、時代を越えてプロジェクトが価値を保ち続けることになるかもしれない。

飯：play hereを今の自分だけの居場所にしようとは思ってないもんね。

熊：自分の思い入れは当然ありますけど、公の器って書く「公器」ですからね、play hereは。だからさ、託し託され、委ね委ねられるっていうさ、そういうことがヘルシーに循環していけば良いんじゃないですかね。そう考えているから、できれば気持ちよく誰かに自分の座を託したいです。

小：後の人が困らないようにして、ですね。

熊：困るにしても、自分が感じた困難ではない、別の種類の困難を感じてもらいたいです。それが、きっと社会の進歩だったり、プロジェクトの進歩の証ですよ。

飯：だね、それが良いよ。

小：ちゃんと成功したな、って思えたら、それが良いですね。

熊：あ、でしたね、まだ成功したって言えないんだった。

飯：なはははははは。

熊：あはははははは。

飯：成功するまでの論理と、それをそのあと続けていく論理。その両方とも大事にしていきましょ。

熊：ぬおおおおお。

小：ですね。

小金井みんなの公園プロジェクト「play here」

公園は、より良い社会のための練習場

発行日：2026年4月1日

企画・執筆・編集：熊井晃史

写真：東海林広太（play hereコンセプトイベント「栗山公園のんびりデー」）、熊井晃史（「顔の見える公園を目指して」など）

デザイン：上妻森土

校正：小林勢（小金井市環境政策課）、飯石藍（公共R不動産シニアマネージャー兼編集長／株式会社nest取締役など）、土橋遊（ライター／コーディネーター）、鎌田芙実（公共R不動産プロジェクトマネージャー）、松田東子（公共R不動産研究所研究員）

HP：<https://playhere.site/>

本書のテキストデータは、公式サイトで公開されています。

視覚障害などの理由で書字へのアクセスが困難な方は、

そちらも併せてご活用ください。